

日本作業科学研究会ニュースー作ら， さくらー第7号



発行年月日 2009年12月25日

発行者 日本作業科学研究会

ウェブサイト <http://www.jssso.jp/>

編集責任者 吉川ひろみ

第13回作業科学セミナー報告

去る2009年11月22日(日)・23日(月・祝)，福岡国際医療福祉学院にて「作業科学の和と話と輪～作業がつなぐ人・明日・可能性～」をテーマとした236名の参加者による“作業まつり”を開催することができました。作業科学が取り持つ縁だけで結成された，母校も職場も違う実行委員は当日を迎えるまで不安でいっぱいでした。始まってみると講師，演者，話題提供者のパワーと参加者の皆様の表情から不安が吹き飛びました。

今回のプログラムは実行委員より自分たちが創る作業科学セミナーでしたいことをまとめた議事録と今年の第12回作業科学セミナーのアンケートから組み立てました。22日は「初めての作業科学～初心者向け～」，そして西九州大学 presents パネルディスカッション「自然環境と作業科学」では南ダコタ大学の Moses N Ikiugu 先生の発表から作業科学の新たな一面を発見しました。6代目佐藤剛記念講演の講師は吉備国際大学の港美雪さんで，作業科学の知識がどのように実践に生かされるか，ということに改めて認識させられ，勇気づけられました。ワークショップの畑間英一さん，葉山靖明さんの「作業と私」の話，畑間さんの奥様を含めた「演奏」という作業遂行には会場が感動で震えました。

22日夜に行われた懇親会では約100名の参加者による福岡名産が当たるビンゴゲーム，沖縄の三線演奏，畑間ご夫妻のフォルクローレ演奏，踊りと大変盛り上がりました。

23日は国立台湾大学の Jin-Ling Lo 先生の

特別講演でした。台湾でも日本と同じようなことが起こっており，作業科学をどのように作業を基盤とした実践に結びつけるかということ学ぶことができました。これを機会に台湾と日本の作業科学のネットワークを作り，アジアでの発展を共に行いたいと思いました。最後のシンポジウムでは「作業科学のネットワーク構築」と題し，作業科学を含んだ勉強会を行っている3グループと世界的組織に関与している2名のシンポジストに発表していただきました。発表から「未熟であることを恐れず，全員が主催者，論理的思考と表現力の未熟さを認識しながら前向きに」というのがキーワードではないかと思いました。

研究発表に関して，今回は嬉しいことに応募が多く，質の高い発表ばかりでした。

セミナー会場の外では“作業まつり”にちなみ，作業科学を学びたくなったらすぐ文献が買えるように書籍販売を，セミナーの途中で小腹が空いた場合，またおみやげの購入ができるよう作業所の作品展示，販売という休み時間も楽しめる企画を準備しました。多くの方がご利用して下さったとのことで皆様喜ばれていました。

第13回作業科学セミナーを開催するという「作業」は実行委員にとって意味ある作業でした。参加者，関係者，スポンサー，出店して下さった書店，作業所の皆様に心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

来年は既につながっている沖縄で皆様にお会いできることを楽しみにしています。

(村井真由美，愛と結の街)

ワークショップ発表者の感想

先日の作業科学セミナーでは大変お世話になりました。とても有意義なというか、夢のような時間をありがとうございました。あのような学問があり、本当に有り難いです。「生きる」ことを、細分化したものが「作業」と私は感じます。病気などにより、「作業」遂行に障害がある人にとっては、「作業」の有り難味というか、それは命の有り難味ということ、身を持って感じます。そして、小さな「作業」でも可能化されれば、明日を生きる精神の核となります。「作業」は作業療法士にとっても作業療法にとっても核と思いますが、「作業遂行に障害がある人」にとっても生きる核です。その「作業」を研究する「作業科学」は人類全体にとって必要な学問だと思います。どうか、研究、プロモート活動をお願いします。私でお役に立つときは仰ってください。

(葉山靖明，デイサービスけやき通り)

演題発表者の感想

おいしいものを食べた時，ヌチグスイと沖縄の方言では表現します。「命の薬」という意味です。沖縄で勉強会を発足して1年足らず。漠然とした不安をいつも抱えていました。今回、未熟さを恐れずに参加して、取り組むべき課題を明確化できたことが大きな収穫でした。「作業」が可視化できたことで希望が生まれました。事例報告と研究報告から、丁寧に物語と情報を集める意味を学びました。ワークショップ、特別講演、シンポジウムから、作業に焦点をあてることの価値を確認できました。同じ哲学を信じる人々の中で、つながりは広がり、学ぶことの意味と目的を再発見できました。この経験は挑戦するエネルギーを強くしました。セミナーでは情熱と知恵を授かりましたが、挑戦する心を育めたことに最も感謝しています。主催、参加を含めて、

セミナー開催に関係するみなさま，ヌチグスイをありがとうございました。愛と結に感謝。

(琉球リハビリテーション学院，上江洲聖)

参加者感想 初めての作業科学セミナー

『作業科学』に以前から興味はあり、文献を読んだりしたこともありましたが、私には十分理解するにはとても難しく、敷居が高い気がして身近に感じる事ができない学問でした。今年の作業科学セミナーが福岡で開催されることを知った後も、鹿児島人の私には参加しやすいと思った反面、どこか気後れしていました。悩みに悩み前日になって行くことを決めました。セミナーでは最初に初心者向けの講演があり、作業療法士は作業療法について悩み、そして作業科学にたどり着いた人も多いのかも、と勝手な解釈をして場違いだ感じていた自分をリラックスさせました。正直、セミナー全体を通してよく分からない部分も多かったです。しかしワークショップの発表者のお二人の話が衝撃的で、作業療法をこんなにも理解し好きでいてくれる人達がいるのだと驚き、感動しました。『作業』への興味が増した今、自分の『作業療法』を再考したいと思います。参加を決めた自分に拍手！

(東康子，谷山病院)

事務局からのお願い

平成20年度と21年度の年会費を納入された皆様に、「作業科学研究」第3巻第1号を郵送しております。また、研究会ホームページ会員専用サイトのパスワードが変更され、そのご案内をメールで送っております。職場や登録時のアドレスに変更のあった方、メールや機関誌がお手元に届いていない方は、事務局までご連絡をお願いいたします。

事務局アドレス：secretariat@jssso.jp

(坂上真理，札幌医科大学)

平成21年度 第1回理事会報告

【日時】2009年11月22日9~11時

【場所】福岡国際医療福祉学院

【出席者】宮前, 吉川, 村井, 浅羽, 近藤,
西野, 港, 西方, 西上, 坂上

【議題】

- 1) 機関誌 (西野, 港, 村井)
第3巻第1号400部完成, 配布開始
- 2) ホームページ (HP) (浅羽)
IT管理者を年間10万円で浅羽明恵氏に依頼→承認
- 3) 広報・ニュース (近藤, 吉川)
ニュース5号, 6号発行, HPで公開。JOS論文抄録の翻訳を会員専用サイトに掲載→当面は新刊のみ翻訳することを確認
HPに研修会, 会員近況など掲載
- 4) 第13回作業科学セミナー (村井)
中国語通訳者変更, 事前申込はセミナー140名, 懇親会60~70名。研究発表は14題 (2題不採択)
- 5) 第4回総会決算 (坂上)
12回セミナー参加者が多く409,812円残となり, 収支差額が505,926円
- 6) 第14回作業科学セミナー (村井)
沖縄で開催, 大会長は村上典子氏。琉球リハビリテーション学院がバックアップ, 酒井ひとみ氏がサポート予定。開催日検討中
- 7) ISOSとのセミナー共同開催 (浅羽)
2011年に当会とISOS共同でセミナー開催を検討→継続審議
- 8) 佐藤剛記念講演選考基準
詳細基準は決めないが, 決定には理事会の承認が必要
- 9) セミナー以外の研修
来年OT学会 (仙台) ワークショップへの応募を検討→継続審議

平成21年度 総会報告

【日時】平成21年11月23日11:45~12:30

【場所】福岡国際医療福祉学院 シーサイド
ももち新キャンパス (福岡市)

【議長選出・書記・議事録署名人の任命】

議長: 佐藤嘉孝 (岡山県立精神科医療センター), 上江洲聖 (琉球リハビリテーション学院)
書記: 古田彩 (医療法人禎心会 訪問リハビリステーションら・ぱーす) 梅田育子 (高橋脳神経外科病院) 議事録署名人: 渡辺明日香 (北海道文教大学), 小田原悦子 (聖隷クリストファー大学)

【定足数】会員数261名 (11月22日現在)
総会参加60名, 委任状提出52名, 合計112名で総会成立

【議題】

- 第1号議案 平成20年度 (2008年10月~2009年9月) 事業報告 →承認
- 第2号議案 平成20年度 (2008年10月~2009年9月) 決算報告・監査意見書 →承認
- 第3号議案 平成21年度 (2009年10月~2010年9月) 事業計画・予算案 →承認
- 第4号議案 次期作業科学セミナー大会長承認の件: 開催地を沖縄県, 大会長として村上典子氏 (豊見城中央病院) →承認

平成21年度 第2回理事会報告

【日時】2009年11月23日16時半~17時

【場所】福岡国際医療福祉学院

【出席者】宮前, 村井, 浅羽, 近藤, 西野,
港, 西方, 西上, 坂上

【議題】

- 1) 機関誌, ニュースの内容
機関紙第4巻, ニュース7号はメールで内容確認
- 2) ISOSとのセミナー共同開催
2012年開催を前向きに検討→継続審議

3) OT 学会ワークショップ

研究会として代表者を立てて応募

4) 組織の見直し

6月理事会で検討

5) 第14回作業科学セミナー

2月開催の申し出があったが，11，12月で調整を依頼。村井がサポート，HPについては浅羽明恵氏と連絡・連携を確認
セミナー時，機関誌を書籍販売の隣に置く。

第14回作業科学セミナーのお知らせ

今回は沖縄県での開催となります。時期は11月初旬から12月初旬を予定しています。会場は検討中ですが，那覇空港からのアクセスを考慮して候補会場を挙げているところです。理事会から助言を仰ぎながら，作業科学に対する理解が深まり，臨床に活かせるプログラム内容を考えています。随所には，沖縄らしさをお届けできる企画を盛り込んでいくつもりです。

作業の力が生み出す感動を参加される方々と，そしてその周囲の方々まで共有できるようなセミナー作りを目指していますので，どうぞふるってご参加ください。

めんそーれ，沖縄へ！

(村上典子，作業を問う会／豊見城中央病院)

西九州大学プロジェクトの紹介

2009年4月より西九州大学健康福祉教育研究プロジェクト「神埼の自然環境保全における文化財の活用ー作業的側面からのアプローチ」を立ち上げました。ここでは，このプロジェクト立ち上げの背景と目的について述べたいと思います。

人類の誕生以来，きれいな空気や水，食糧や燃料や薬，精神的な癒しやひらめきなどの自然の恵みを人は「作業」を通して甘受し，生活を営み，文化を築き，いのちを育み，つないできました。しかし，近年の急激な地球

温暖化とこれに伴う環境変動や生物多様性の問題が「人間活動」に起因することが明らかになってきました。さらに自然環境破壊による自然の恵みすなわち生態系サービスの減少が人の健康や福祉（well-being）に及ぼす影響，さらに社会や人類の持続性に及ぼす影響が懸念されています。未来にわたる「持続可能」な社会を実現するためには，環境負荷の大きな人間活動から小さなものへ，さらに避けがたい自然災害などの環境変動への対策と適応など技術改革を含む「人間活動」の見直しが国際的な緊急課題です。

本プロジェクトでは，環境教育教材の一つとして，地元佐賀県神埼市の「作業史マップ」を作成して活用することを目指しています。神埼には旧石器時代から現代にいたるまでの遺跡や文化財が途切れることなく存在しています。これらの文化財を分析することにより，時代をとおして，人々が神埼の豊かな自然を利用して生活を営んでいたことを明らかにしたいと考えています。そして神埼住民が地元の豊かな「生態系サービス」の存在に気づき，このサービスの上手な活用法を考案していく過程に貢献したいと思っています。さらに作業科学の視点を取り入れた「人間活動と持続性」をテーマに市民の方や関連分野，とくに保健医療福祉関連職との連携を深めて，生態系サービスと健康や福祉（well-being）との関連を明らかにする研究を進めたいと考えています。（青山真美，西九州大学）

作業科学専門学術誌

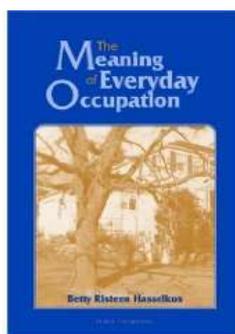
Journal of Occupational Science (JOS)

作業科学の国際学術誌JOSのホームページ <http://www.jos.edu.au/>から定期購読申込みができます。一年間に3号の発行でしたが，来年から4号発行になります。

本の紹介 「The Meaning of Everyday Occupation」

Betty R Hasselkus 著, Slack, 2002.

「人というものはその気になって考えてやってみれば, もっと健康な自分になれる」という Mary Reilly の名言は作業と健康の結びつきを主張していますが, 本書では著者である Hasselkus 自身の体験や研究, 様々な研究者の研究や主張を通して, 人が行う作業の意味を日常的な面や, 空間, 場所, 文化など様々な側面から説明しています。



本書中で「作業療法で最も不満足な経験」に関して述べたある OT は, 学生時代に半昏睡状態にある患者に対して食事動作に関する ADL をオーダーされたことを挙げていました。その OT にとっては半昏睡状態の人が食事動作を獲得することが意味のないことと思ったので不満足な経験として挙げたかもしれませんが。しかし著者は Ann Wilcock の提唱した doing (すること), being (存在すること), becoming (成ること) の考えを基に doing としての作業だけに注目するのではなく, その作業によってその人の存在がどのように変化したのか, その人にどのような変化が起きたのかに注目すべきであると述べています。つまり食事という作業の意味を考えることで doing の側面だけでなく, being や becoming の変化を OT は期待されていたのではないのでしょうか。

私は本書にあるように作業療法が生きる意味を与える仕事 (meaning giver) となり, 対象者が対象者にとって意味のある作業を行えるようになること, そしてそのことが人の健

康に結びつくことを期待しています。この本を通じて作業の多面的な意味を再考するきっかけとなりました。

(鈴木達也, 聖隷クリストファー大学)

カナダ・アメリカ合同 OS 学会のお知らせ

Joint Conference of the Society for the Study of Occupation: USA (SSO:USA) and the Canadian Society of Occupational Scientists (CSOS) が 2010 年 10 月 14~16 日にオンタリオ州ロンドンで開催されます。テーマは「作業科学における境界と架け橋の再定義 Redefining Boundaries and Bridges in Occupational Science」です。主催者は, 作業の研究に関連する方法論, 理論, 実証的知識を共有しようと各国からの参加を呼びかけています。サブテーマは, ①共同研究の育成と維持, ②理論の発展とチャレンジ, ③方法論と研究法の発展と変化, ④知識の構築と翻訳です。演題応募の際の抄録は 375 語以内, 文献 5, キーワード 3 を含み, 2010 年 2 月 15 日深夜 12 時 (現地時間 EST) までに, c.lysack@wayne.edu へ送信してください。

編集者からのお知らせ

第 13 回作業科学セミナーで, Jin-Ling Lo 先生から Meaning of Everyday Occupation の中国語訳と国立台湾大学作業療学科の旗をいただきました。



お知らせなど, このニュースに掲載したい記事がある会員は, 吉川ひろみ yosikawa@pu-hiroshima.ac.jp まで, お送りください。ニュース発行は年 2 回の予定です。